

## あいまいな都市 －梶井基次郎の作品における自己と他者－

Stephen Dodd

梶井基次郎は1901年に生まれ、わずか20あまりの短編小説を残して、結核にかかったので1932年にこの世を去りました。こんにち、国内外で最もよく知られている作品は1925年に書かれた『檸檬』です。知られているのはせいぜい『檸檬』くらいだと言えるかもしれません。梶井の時代には、短編小説が盛んだったということは否定できないにしても、魅力的な叙述体のプロットと、美しい詩的散文体との両面において、彼の短編小説は群を抜いています。大正後期から昭和初期にかけて変わりつつあった自己と他者の境界線を定義する―この難しい問題に、梶井基次郎はどのように取り組んだか。今日の発表では、この点について、特に都市空間の表現方法の視点から、考えてみたいと思います。もっとも有名な小説である『檸檬』にしばってお話します。

彼の著作活動は、日本近代文学史の中では、短いけれども非常に重要な時期です。なぜなら、新感覚派とプロレタリア文学という二つの文学運動が自己と他者の定義をめぐる論争をした時代だからです。両者は、個人とそれより広い社会とのつながりを、どうすれば上手く表現することができるか、さらには、このような自己と他者の関係を表現するために最も適した文学手法は何か、ということについて論争をしました。梶井は、厳密にはどちらのグループにも属してい

ませんでした。両者から影響を受けています。そしてもうひとつ、当時の小説家と批評家にとって関心の的であったのは、言うまでもなく私小説です。梶井が、その流動的かつ興味深い自己と他者の定義を表現するにあたって、今述べたようなあらゆる運動の影響を受けたのは、ごく当然のことと言えるでしょう。

この発表には、四つのポイントを差し上げたいと思います。一つには『檸檬』の主人公は、様々な異なる記憶を語ることで読者に自分自身をさらけだして行きます。記憶を語るということの効果はふたつあります。すなわち、記憶はある時には普遍的な自己認識を裏づけ、またある時は逆に、安定したアイデンティティーが完全に失われてしまっている、という印象を生み出すということです。第二のポイントは、この短編小説にある不安定性もしくは流動性の要素が、日本文学における近代的な自己認識の基本的な要素であるということです。三つ目のポイントはその流動性を表現しているがゆえに、梶井は一つのテキストの中でも非常に多様性のある自己を表現したということです。最後のポイントは内面に秘められた自己と外界で起こる事象との境界線は明確だとはとても言えないのではないか、そういう可能性を梶井は見出そうとしていた、ということです。

スティブン・ドッド／ロンドン大学 アジア・アフリカ研究院